

ロバート・W・ブキャナン

4 コウノトリのバラッド

(スカンジナビア伝承)

嵐が吹き荒^{すさ}ぶデンマークの海辺に 未亡人はただ独り住んでいた
打ち寄せる波のすぐそばで 心地よい森が陰なすところ
だが心穏やかな日々は無く 悲しみは小屋の戸口のすぐ外に迫っていた
昼も夜も未亡人の思いは 波に乗って沖へ沖へと運ばれていった

その白い足で海を鎮め嵐をおさめる神に 5
未亡人は 跪^{ひざまず}いて祈った どうか息子を返して欲しいと
神が起こす海風が 息子を遠くへと攫^{さら}っていったから
息子はある夏の日 遠いインドの島々を目指して船出したのだから

あの時息子は嘆いた 「お母さんお母さん 僕たちには土地もお金もない
鼻輪で繋がれた褐色の雌牛は 年老いて乳も出ない 10
この杯から流れる銀色の水が 僕にこう言うんだ
『愚か者よ 輝く海の富も知らず 陸で飢え死にする気か』って」

帽子に緑の小枝を差すと 息子は母親に口づけし
その夏の日 ひしめく船をかき分け 漕ぎだした
涙を湛^{たた}えて海辺に立つ母親の先には 帆に風を受けて旗を翻す船 15
甲板に立ち帽子を振る息子 港を後にする立派な船

三年もの間母親は待ち続けた 悲しみに耐えて目を凝らし
戸口で水平線をただ見つめるだけの日々だった
青い顔で藁のベッドに身を投げ出し うねる波の音を耳にした
海の上では今も月日が流れ行き 母親はまだ独り取り残されている 20

「ああ愛しい子 けれど身勝手な子 今ごろぐっすり眠っているのかしら
恐ろしく深い海の底で あなたの骨の周りを水が轟いているのかしら
あなたは暗く冷たい海の底で 寝返りをうつことも泣くこともできない
この母でさえ あなたを温めることも 寝ているあなたに口づけすることもできない」

母親は日曜日に来るたびに 疲れ果てた足どりで教会に通ったが 25

安らぎはあたえられず 神に祈る心はその胸から失われていった
九月になり教会で昔のある物語を聞いた
ナインの未亡人の息子の話だった 胸を締めつけられ母親は涙を流した

泣きながら小屋に戻った 疲れはさらに増していた
母親は悲しげに 小屋の傍らに立つ背の高いトネリコの樹を眺めた 30
樹には何年も前から コウノトリが巣を作っていた
歳を重ねたコウノトリは ^{あまた}数多の遠い国々のことを知っていた

毎年秋になると コウノトリは屋根の上で翼を広げ
雲に向かって立ち上がると 風に乗って南へ渡った
夏を求めて 遥か遠い紅海まで飛んだが 35
春になると立派な翼で 小屋に戻ってきた

母親はコウノトリが飛び立つのを見た かつての速さや力強さはなかった
今や年老いたその姿では もう先は長くないだろう
「ああ 変わらぬ友よ 愛しい息子はお前と幸せそうに遊んでいた
緑の葉を首飾りにしてかけてやったことも 食べ物をあげたこともあった 40

その注意深く丸い目は 私が知らないものを見てきたのではないか
鏡のような海に浮かんで死んでいる私の愛しい息子を
私たちは何年もここに棲むお前の巣を見守ってきた
今度は私の心を救う番だというのに もうお前にその力は無い」

力が無いだと 神の優しい御意志をコウノトリが知らぬというのか 45
帰らぬ息子はいったいどこに居るのか 死装束に包まれているのか
そうではない モロッコの灼けつくような海岸で 奴隷となって立ち尽くしている
鎖を震わせ 涙を流して故郷の方を見つめている

息子は 痛みを和らげるように微笑みかける優しい目をした奴隷にも
ターバンを巻いた太ったトルコ人にも目を向けず 50
母親の待つ小屋を思って 悔しさに唇を噛みしめる
目を凝らせば 涙で霞んだ視界の向こうに船影が見える

突然 息子は目を見張った 目の前の砂の上に
細長い脚でなつかしい空気をまとった 居るはずのないものが立っている
コウノトリだ 年老いた^{いか}厳めしいコウノトリ 目は臍げに霞んでいる 55

故郷にいたころよく知っていた あのコウノトリそっくりだ

「ああ本当にあいつなのか あの昔からの友が勇敢にも旅してきたのか
あの頃と同じ明るい色のくちばしと脚 あの毛羽だった黒い翼
見覚えのある歩き方 重く堂々とした足取り
あいつなら絶対に僕の顔を覚えているはず」

60

デンマークに再び春が訪れ 今年も若葉が萌える
「春が来たぞ コウノトリが帰ってきた」 皆は岸辺で歓喜する
人々は晴れ着を身にまとい 司祭様もいらっしゃる
そこにはあの母親もいて 空を見上げている

あのコウノトリだ 年老いた^{いか}厳めしいコウノトリが地に舞い降りる
皆は叫ぶ 「ああ あれを見る 脚に固く紙が結ばれている」
我先にと手を伸ばして紙を^{ほど}解き 開いて読む
母親は驚いて悲鳴をあげる 今まさに奇跡が起こったのだ

65

「お母さん 僕は生きています ですが奴隷として囚われています
ですから身代金を 海の向こうに送ってください
もしこの手紙が届いたなら 僕にその鳥を送ってくれた神を称えてください」
後には どうやって自分を自由にするかという指示が続いていた

70

ああ 安息日に教会の扉の前に置かれた皿を満たすため
なけなしの蓄えを惜しむ者は誰一人いなかった
牛飼いの娘は晴れ着を買おうと貯めていた金貨を一枚
物乞いでさえ人目を忍んで皿に近寄り 貰ったものを投げ入れた

75

船乗りであった息子は 今ふたたび母親の小屋で暮らしている
漁師となって網を投げることに満足し もう遠くを^{さまよ}彷徨うことはない
ありったけの祝福と その何倍もの栄誉を贈ろう
夏を追いかけ世界を巡り 息子を自由にしたコウノトリに

80

(宮原牧子訳)